

# サンチャイ通信

第1号・1996年3月

## 銀色の弾丸、カトマンズを疾走中！

このところ、カトマンズの日本人の奥様方の中で話題になっていることがある。「あの青ナンバーは誰の車かしら？」

かまぼこのような丸い車体、ウェッジの鋭いノーズ、ワイドトレッドのラジアルタイヤ、そしてネパール随一の低い車高~~~~~そう、これこそが我らが愛車、カローラセレスなのだ。

忘れもしない1月9日夕刻、その車はJICA事務所に届いた。駐車場は黒山の人だかりとなった。20年以上も前のカローラやスターレットが幅を効かせるこの町だ。セラやRAV4を見かけることはたまにあっても、セレスのような本格(?)スポーツカーは絶対にはない。日本での評価はともかく、ここネパールでは間違いなく日本の先進技術の粋をこらした最先端マシンなのだ。

それを証拠(?)に、セレスはカルカッタ上陸時に既にパワーウィンドウのユニットをまるごと盗まれていた。そんなもん盗んで犯人がそれをどこに使えたかは定かではないが、とにかく目立つこの車、この町で悪いことはできません。

悩みといえば、最高時速40km程度しか出せないこの町で、トップギアが使えないこと。サスの固いこの車で、未舗装のデコボコ道は腰にきつい。そして、ルール無用の悪ドライバー、歩行者、サイクリスト、そして犬に牛、たまに無邪気に投石してくるクソガキもいる。任期3年間、無傷だったら奇跡だ。

盗まれたパーツも取り寄せ、只今順調に走行中。運転手が休日となる土曜日と祭日は私もドライブする。しかし、今のところは運転も慎重だ。ここでの運転者の標語は、「気をつけよう。あいつはミラーを見ていない。」なのだから。(浩司)

## カトマンズの交通事情

カトマンズ市内を走っていると色々な乗物を見かけます。車、バス、オートバイはもちろん、テンプーと呼ばれる三輪バイクは市民の足としてタクシーの役割を果たしているし、トラクターもミニトラックとして車道を走っています。自転車も車という感覚なのか、信号では車とならんで道の真ん中に陣取っているのが、興味深いです。

また、メインストリートをはずれると、細い道が多くなるのですが、車1台がようやくと思える道も両方向からおかまもなくドンドン進んでいき、このすれ違いのたびに心臓がドキドキしながら車にのっています。関心するのはドライバーのテクニック。どんな細い道でも臆することなく進み冷や汗一つかきません。いずれにしても、私はこの国で運転する事をあきらめています。(美澄)

## 町の清掃マシーン 「モウモウ」と「ワンワン」

カトマンズでは、ごみが散乱していて、ちょっとしたスペースがあるとすぐごみ捨て場にされてしまいます。先日も朝の散歩に出かけようと門を出ると、大量の靴が捨てられていました。幸い、我が家にはこれ1丁でしたが、生ゴミ置き場にされている家もあります。しかしよくしたもので、生ゴミは道行く犬や牛がたべくれます。そう、彼等は町の掃除屋さんなのです。でも、食べたあとの落とし物も片づけてね。

(美澄)

## シバラトリのカネ取り

2月17日(土)3連休を利用してJICA事務所の村松さんと一緒に、先に出張でポカラに行っている夫に合流すべくポカラへと車で向かいました。カトマンズをでて暫くすると行く手を遮る子供。何かかと思っていると口々に「シバラトリ!シバラトリ!」と叫んで車を囲んでしまいました。ドライバーが5ルピーをあげるとすっとおしてくれましたが、そうです、この日は、「シバラトリ」というハロウィーンのトリック・オア・トリートの様に道行く人・車にいたずらをする日だったのです。ポカラまでの約6時間の道のりがある村々をずっとこの調子で通せんぼされ、ひどい所では村の入り口と出口で通せんぼされながら、5ルピー、10ルピーと払っていくうちに100ルピーぐらいになってしまいました。面白かったのは、「細かいお金がない。」といったらちゃんとおつりをくれたことです。

皆さんも、シバラトリの時期にネパールきたら小銭を持ち歩いていた方がよいですよ。さもないと、通してくれませんのでご注意下さい。(美澄)

## 私の仕事紹介（その1）「プレスツアー」

3月12日から14日まで、「プレスツアー」という企画を実施した。これは、ネパールのプレス、新聞、ラジオ、テレビ等マスコミから希望者を募って、JICAの協力現場取材してもらうもので、前半をカトマンズ近郊のサイト、後半はチトワン、タナフ両郡のサイト視察とした。

特に今回は、防災と教育分野に力を入れる日本の姿を印象付けるため、防災分野では治水砂防センタープロジェクトとトリブバン空港レーダー管制の専門家、教育分野では、カリキュラム開発センターの専門家、ジャナック教科書印刷センターへの無償資金協力機材、「21世紀のための友情計画（通称青年招へいプログラム）」で日本に派遣されたネパール人教師、基礎初等教育プロジェクトに対する小学校建設資機材の無償資金協力、理数科教師の青年海外協力隊員等をスケジュールに盛り込んだ。

中には、夜のレセプションで酒を飲み過ぎ、翌日朝の取材ができなかった、自覚の足りないプレスマンもいたけれど、真面目なツアー参加者からは、「JICAはネパールでこれだけの素晴らしい活動をしているのに、なぜその影響力をもっと有効に使わないのか。」と疑問の声が投げかけられた。

プレスツアーという企画は、そもそもが昨年度JICA20周年記念行事として開催されたもので、21年目の今年、昨年度の倍近い予算が付いてしまったために、前回の企画をそのまま踏襲して今年度開催した。私も広報はあまりやったことがなかったので、取りあえずは前例になったというのが正直なところである。ただ、今回の企画を終えてみて、事務所の事業広報のあり方について、若干の疑問を持ったのも事実である。

イベント色の強い広報を考えすぎるあまり、通常の実業広報がおろそかになっていなかったかということである。本来なら、日本から調査団が来て新規案件について事業実施の合意がネパール側との間でなされれば、その都度プレスリリースがしっかりなされてもよかった筈であるが、現状はあまりそれに力を入れている感じではない。調査団は、帰国前に必ず大使館とJICA事務所に報告に行くが、本来こうした事業実施を報告しなければいけない相手は、ネパール国民なのだと思う。ましてや「住民参加型開発」が流行となりつつある昨今、そのアピールを積極的に行って住民の理解を得なければ、住民参加は浸透しない。ツアー参加者が抱いた疑問もそこにある。

だから、イベントとしてのプレスツアーのあり方をもう一度定義し直して、改めて日常の実業広報のあり方を真剣に考えてみたいと思う。取りあえず今年度はこういう形でやったけれど、これで良いとは全然思っていない。着任して5カ月で自らが完璧なスポークスマンになれたとはとても思えない。まだまだ勉強不足である。

でも、こんな考え方もある。タナフ郡ドゥムレ村の細谷隊員は、4月上旬には日本に帰る。その彼の学校を訪れ、授業風景を視察した。細谷君はネパールの教育分野の隊員のリーダー的な存在で、任地の学校教員の問題点を的確に捉え、改善しようと努力してきた。2年間の任期を終えるにあたって、彼にはその活動を総括する機会を与えてあげたかった。任地の学校の教員の中には何度言っても怠慢な奴が何人かいたらしいが、私たちがプレスマンを連れて行き、彼の活動が記事になることで、変わらない人間を変えるきっかけにもなるかもしれない。広報は使い方一つで協力事業実施を円滑にするインパクトを持つのだ。（浩司）

## 一時帰国のお知らせ

早いもので、着任から4月で半年を迎え、健康管理休暇をとることになりました。日程は下記の通りです。

4月25日福岡着 27日成田着

5月21日成田発

連絡先： 鴨下喜代澄方 0422-31-7510

山田勇方 0584-71-0251

## 編集後記

★今から丁度10年前、私はアメリカに住んでいました。その時の経験で、日本の友人からの手紙が多いと、誰にどんな返事を書いたか忘れがちで、往々にして同じ内容の手紙を同じ人に書いてしまうことがあります。また、同じ内容の手紙を複数の友人に別々に書くのはかなり大変な作業です。

そんな問題を妻も抱えており、それだったら月1回のニュースレターを作ってそれをコピーして同封しようということになったわけです。「サンチャイ」とは「元気」という意味のネパール語です。その名の通り、このニュースレターを読んで、私たちが元気で過ごしていることがおわかり頂けたら幸いです。

カトマンズも3月下旬を迎え、既に半袖でも生活できるくらいに暑くなってきました。じきに雨季もやって来ることでしょうが、その前に予定している一時帰国が今から楽しみです。（浩司）

★早いもので私がネパールに来てから2カ月が過ぎました。来た当初はセーターを着ていたのに、今では半袖で充分です。庭にも桃を始め色々な花が咲き始めました。ネパール語も習い始め少しずつですが、ネパール語しか出来ない使用人たちともコミュニケーションがとれるようになり、ゆっくりとですが、こちらの生活にも慣れてきました。

筆無精な私が、今までお世話になった方に、こちらで元気であること、またネパールでの生活で見たこと感じたことをお知らせしたくて、この通信を夫と共に作ることにいたしました。これを読んで時々私たちのことを思い出していただけたら幸いです。（美澄）